

「家庭内別居とひきこもり」～夫婦関係と子ども～

- 仮名：Aさん
- 年齢：53歳
- 性別：男性

【普通の家庭】

相談者は都内在住で保険会社勤務のAさん（53才）。Aさん一家は4人家族で、妻（54才）は管理栄養士として学校に勤務していた。相談の主な内容は長女（29才）のことだった。実は、娘は中学・高校時代に不登校となり、フリースクールに入学した。その後は都内の大学へ進学。わざわざ実家から離れて住むほどの距離でもなかったが、娘がどうしても「都心から大学に通いたい」と言い張ったため、Aさん夫婦は娘のために都心にマンションを借りることにした。親の支援もあり、なんとか大学を卒業できた娘だったが、卒業後は一度も就職やアルバイトをすることはなく、Aさんら夫婦からの仕送り月々20万円を頼りにひきこもり生活をしていた。

【夫婦関係の影響も…】

一方の夫婦関係は冷え切っていて、今更修復できる状況ではなかった。きっかけは10年程前、Aさんの不倫とギャンブルで作った借金が原因だった。当時、Aさんは社内の配属先が変わったばかりで、担当部署はAさん以外全員女性だった。ある日、Aさんは同じ部署の年下女性と関係を持ち、それ以来1年近く関係が続いたという。Aさんを怪しんだ妻が探偵に依頼。不倫の事実が発覚したのだという。それからというもの、妻は酒を飲んでAさんに対して暴言を浴びせることが多くなったらしい。それと同じ時期に、Aさんがギャンブルに注ぎ込んだ500万の借金が妻にバレたのである。全てAさん自身がしたことだから、自業自得としか言えない。しかし、当時のことを振り返って話すAさんに“反省の色”は見られなかった。それどころか、すぐに話をすり替えて「家内が娘を甘やかすからこんなことに…」「娘の世間知らずは家内に似たんですよ」と、責任転嫁を続けた。私が「嫁さんは娘についてどない言うてんねん」と聞くと、「家内とはほとんど会話していないんで…」とAさんは急に弱気になった。

【母親と娘】

Aさんの娘は現在も働かず、昼夜逆転したひきこもり生活をしているという。家事や食事作りを全くしない娘を心配したAさんの妻が、週に3日、娘のマンションへ行って食事作りや掃除などの世話を焼いていた。Aさんの妻が「具合が悪い」という娘を心配して病院を受診することを勧めると「関節が痛くて病院に行けない」「病気がないから行かない」と頑なに受診を拒むという。そして、Aさんの妻が食事を作り終えた後「一緒に食しましょう」と娘に声を掛けると「一緒には食べたくない」と言って自分の部屋に閉じこもり、一人で食事を済ませる娘。干渉せずに放っておけばよいのだが、Aさんの妻は夫と向き合う苦痛から、娘の世話焼きに没頭することで現実から目を背けていた。自分の満たされなさを娘に投影する母親と、母親の気持ちを察して家から出ない娘…。けれどもそれを続けている限り、本当の意味での空虚感は満たされないだろう。自分の寂しさを満たせるのは、最後には自分しかいないのだ。

【解決への手立て】

Aさん宅では、今も夫婦が話し合いもできず無視しあっている。現状維持のまま老後を迎えて添い遂げるか、別居か離婚か—それらは夫婦で決めたらいい。なにせ娘はもう29歳でいい大人なのだから、親権などで悩んだり揉めることもない。ただ、Aさんが全ての責任を奥さん側に転嫁して現実から逃げている限りは何も変わらないし、それは妻も同じだ。お互いに「自分の本心」と「相手」に向き合わない限り、この問題は解決しない。「親離れ・子離れ」は、それができてからの話。Aさん夫婦を後日、個別に呼んで話をした。今後、3ヶ月を目途に娘への20万の仕送りはやめるようにし、社会復帰のための自立支援を使うなどして、娘を徐々に外に出す方法をアドバイスした。そして、当事者である娘自身にも、駆け込み寺に相談に来るように伝えた。